

情動(emotion)の問題について

服部裕幸
(南山大学)

はじめに

筆者は現象学をきちんと勉強したことがないので、このシンポジウム¹の場で話すことは場違いなのではないかという気もするが、異質なものが入りこむことによって予想外のプラスの効果が生じるということもないわけではないので、そのようなことを願って、この場を借りて、少しばかり情動について述べてみたいと思う。以下の話の段取りであるが、前半で、現代英米哲学での情動(emotion)の哲学のこれまでの状況を大雑把に述べ(第1節、第2節)、後半で、情動について筆者が現在関心を抱いている問題について述べようと思う(第3節、第4節)。

第1節 現代英米哲学における情動の哲学の流れ ——自らの研究のあとを振り返りつつ——

現代英米哲学での情動の哲学の状況を概観すると言っても、筆者は情動の哲学一筋で来たわけではなく——とはいうものの、ときどき関連することに出くわしてはきたが——、いろいろなことをやってきて、情動の哲学に腰を据えて取り組むようになったのはここ数年のことである。したがって、これから述べることは、包括的なサーヴェイではなく、かなり偏った筆者の個人史的な色合いが濃いものとなっていることをあらかじめ断っておきたい。

まず現代英米哲学を語るにあたって、20世紀の前半あたりから始めようと思う。というのは、筆者が哲学の道に入ったきっかけが論理実証主義運動への関心だったからである。そのときの筆者の主な関心事は科学方法論や数学基礎論であったが、当然のことながら、意味に関する検証主義などにも接することとなった。ここでは

詳しいことは省くが、言明の有意味性に関する検証主義的基準では、道徳的言明を適切に処理できないという問題が生じ、それに対応するために情動主義(emotivism)という立場が提案されることとなった。この立場では、要するに、ある人が「あるタイプの行動がいいとか悪いとかいうとき、……[その人]は事実的な言明はしていない……ただある道徳的な心情(sentiment)を表現しているにすぎない」²とされる。ここでは「心情(sentiment)」という言葉が使われているが、これは本稿で言うところの情動(の一種)と考えてよいと思う。この見解が妥当かどうかはここでは問題ではない。ここで重要なのは、こうした文脈の中で情動がとり上げられることはあったが、情動が主題的にとり上げられたわけではなかったということである。

論理実証主義運動は衝撃的ではあったが、それほど長くは続かず、内的、外的理由で終わりを迎えることになる。そして、それとともにオックスフォードの哲学者たちが活躍を始める。その一人に G. ライルがいるが、彼は『心の概念』を 1949 年に出版³する。ちなみに、筆者の関心はこの本の翻訳に関わったころから、心の哲学や行為論、言語哲学に移ってきていた。それはともかく、この本の第 4 章のタイトルは「情動」で、当時としてはかなり詳しく論じられている。そこでは情動は動機(motive)、気分(mood)、心の乱れ(agitation)、感じ(feeling)の 4 つに分類されている。注目すべきなのは、彼が情動と感じを明確に区別したという点である。そこでは、ジェームズの情動についての理論も批判されている。これは非常に重要な論点で、後で述べる新ジェームズ主義を考える上で、今日でも参照されるべきものだと思う。ただ、ライルの関心も情動そのものにあっただけではなく、むしろラッセルの記述の理論にみられる言語分析の方法を心の概念に適用してみせ、言語分析が哲学の有効な手段であることを示そうとしたと考えるべきである。

ライル自身は(論理的)行動主義者とは言えないが、『心の概念』が(論理的)行動主義に勢いを与えたことは否めない。しかし、その後、その限界も明らかとなり、心の哲学の領域では心脳同一説や機能主義が提案され、それらをめぐる論争が活発になされるようになってきた。この状況はある程度長く続き、1960 年代から 80 年代くらいまでさまざまな議論が出されている。しかしながら、こうした議論の中では、心的概念が物的概念に還元できるかとか、心的概念なしで済ませられるかといったことが主たる関心事であって、心的概念の例としては知的能力や痛みなどがよくとり上げられた(前者は扱いやすい例、後者は扱いにくい例である)が、情動がとり上げられることはあまりなかった。その理由の 1 つは、ライルの分析が情動では結構巧くいっていると考えられたからかもしれない。

例外的に、A. ケニーが 1963 年に『行為、情動、意志』という本を出している⁴が、それで情動の議論が盛んになったとは言えない。また、D. デイヴィドソンも 1970 年代に意志の弱さの問題を扱った論文やヒュームの誇りの概念をとり上げた

論文を書いている⁵が、ここでも、意志の弱さや自己欺瞞といった現象がいかんして可能なのかということが主題であり、情動の議論が前面に出てきたとは言えないように思われる。筆者自身はというと、素朴心理学(folk psychology)を消去できるかという問題が「物理主義か？それとも心身二元論か？」という文脈において登場する中で、この問題をきちんと議論しようとするれば情動を正面からとり上げなければならないだろう、と考えるようになった。R. ソロモンも 1976 年に重要な本⁶を出している(ことをあとで知った)が、その頃には筆者はこの本を読んでいなかった。したがって、その当時の反響については知る由もないが、筆者の知る範囲では、当時の心の哲学の議論の中では言及されることはほとんどなかったように思う。

20 世紀も末になってくると、心の哲学の領域では、それまでの議論の延長上で「意識のハードプロブレム」などが依然としてとり上げられるが、次第に情動それ自体を主題的にとり上げた論文が目につくようになってくる。これにはいろいろな理由が考えられる。筆者の場合は上で述べたような事情によるが、他にも、20 世紀後半における脳・神経科学の発展とその哲学へのインパクトが大きいと思われる。ダマシオの本はその一例であろう⁷。心理学の方でも、進化心理学などの分野で情動を進化過程の中に位置づけるという仕事がなされるようになってきて⁸、情動についての認知主義をめぐるラザルスとザイアンスの間の論争などもある⁹。こうした他分野での情動の研究に刺激されてか、かつてのソロモンの仕事も評価されてきているように思う。少なくとも筆者の場合は、恥ずかしながら、そういう側面がある。

最近では、2010 年にオックスフォード大学出版局から『オックスフォード・ハンドブック:情動の哲学篇』という本が出るほどになっていて、情動の哲学も、全盛とはいえないかもしれないが、盛況になっているとは言えよう。

(注)

1 本稿は 2015 年 3 月 14 日に慶應義塾大学において開催されたフッサール研究会シンポジウムにおいて読まれた原稿に加筆、修正をほどこしたものである。とりわけ、本稿の最後の部分はその後補足したものである。その当日、村田純一、浜渦辰二、八重樫徹、秋葉剛史、他の方々から有益な質問やコメントを頂いた。ここで感謝の意を表したい。

2 A. J. Ayer, *Language, Truth and Logic*, 2nd. Ed., Victor Gollancz Ltd. 1946, p.107. (吉田夏彦訳『言語・真理・論理』岩波書店 1955, pp.130-131) 初版は 1936 年に出版されている。同様の見解は C. L. Stevenson, *Ethics and Language*, Yale University Press 1945 にも見られる。

3 G. Ryle, *The Concept of Mind*, Hutchinson 1949 (坂本百大・井上治子・服部裕幸訳『心の概念』みすず書房 1987)

4 A. Kenny, *Action, Emotion and Will*, Routledge 1963

5 D. Davidson, 'How is weakness of the will possible?', (1970); D. Davidson, 'Hume's cognitive

theory of pride',(1976).どちらも D. Davidson, *Essays on Actions and Events*, Oxford University Press1980 (服部裕幸・柴田正良訳『行為と出来事』勁草書房 1990) に収められている (ただし、後者の論文は邦訳書には収められていない)。

6 R. Solomon, *The Passions: Emotions and the Meaning of Life*, Hackett 1976

7 たとえば, A. Damasio, *Descartes' Error*, Macmillan 1994 (田中三彦訳『デカルトの誤り』ちくま学芸文庫 2010)

8 エクマンの仕事はダーウィンの仕事の延長線上にある。P. Ekman and W. V. Friesen, 'Constants across cultures in the face and emotion', *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol.17, No. 2, 1971, pp.124-129

9 R. S. Lazarus, 'On the primacy of cognition', *American Psychologist* 39, 1984, pp.124-129; R. B. Zajonc, 'On the primacy of affect', *American Psychologist* 39, 1984, pp.117-123

第2節 哲学では情動の何が問題となるのか

以上で、大変簡単ではあるが、現代英米哲学における情動研究の概観は終えることにする。さて、本節では、情動についての何が哲学者にとって問題になるのか、あるいは、少なくとも筆者にはどのようなことが関心事なのかを述べていきたいと思う。

まず第1に、情動は非合理的かという問題がある。伝統的には情動は理性ないし知性と対置され、とかく理性よりも低く見られ、あるいは否定的に扱われることが多かったように思う。周知のように、プラトンの魂の3分割理論においては、魂は理知的部分と気概的部分と欲望的部分からなるとされ、この3つの部分が巧く調和して働くときに正義が実現されると論じられている。そしてその際、理知的部分とはときに気概的部分や欲望的部分を制御するというようにとらえられている¹⁰。(本稿で言う情動は、一部(たとえば、憤慨など)は気概的部分に属するし、一部(たとえば、愛など)は欲望的部分に属すると考えてよかろう。)こうした考え方では、情動に引きずられた行動は非合理的とされることが多かったように思われる。すなわち、理性に導かれていれば合理的であり、情動に突き動かされれば非合理的というわけである。たしかに、ヒュームのように、理性だけでは行動を起こすことはできず、行動を起こすことができるためには何らかのしかたで情動がかかわらなければならない¹¹とした哲学者もいたが、やはり、哲学の歴史における趨勢としては情動の役割はどちらかと言えば、不当に低く見られてきたのではないだろうか。

しかし、最近の脳・神経科学の知見によれば、情動はむしろ合理的行動をとるにあたって重要な役割を演じているようである。いまではよく知られたことだろうと

思うが、情動を司る脳の部分を損傷しつつも、その他の部分は無傷で、したがっていわゆる理性的判断についてまったく問題ない患者は、二つの選択肢 x と y があつたときに、理論的には x をした方が合理的であると考えられるにもかかわらず、実際にはそれができない（で y をしてしまう）ということである¹²。こうした事実を考えれば、情動を非合理的として否定的にとらえるのには問題があると言わざるを得ない。また、理性をもちいての意志決定を待っていたのでは行動を起こすまでに時間がかかりすぎるといような状況においては、(嬉しさや恐怖などの) 情動に基づいて素早く行動をおこした方が適切であり、その意味で情動（に基づく行動）は合理的なのである。さらにまた、人が理不尽な扱いを受けた場合に憤りを覚えるというように、ある状況ではある種の情動を心に抱くということは当然のことである。それどころか、むしろそれが起らないことの方が不自然であり、その意味で不合理でさえある¹³。このように、情動はかならずしも非合理的なものではないと思われるが、その合理性の根拠や意味合いなどについては、まだまだ精査しなければならない点が多々あると思われる。

次に、情動の志向性という問題がある。これは、情動は命題的態度の一種かという問題と言い換えることもできる。多くの情動は、典型的には「志望校に合格して嬉しい」や「不当な解雇に怒る」や「恋人が交通事故で亡くなり悲嘆にくれている」のような嬉しさや怒りや悲しみに見られるように、その志向内容をもっている。上の例では、それぞれの情動は、志望校に合格した嬉しさであり、不当に解雇された怒りであり、恋人が交通事故で亡くなった悲しみなのである。他の多くの情動もこうした志向内容をもっている。しかし、それを見出すのが難しいケースも存在する。おそらく気分はそのようなものの代表例であろう。特にこれといって具体的に心配な事柄があるわけでもないのに「何となく不安だ」とか、天気がいい日は「何となく心が弾んでくる」、などという具合である。情動について一般論を展開しようとして試みて、たとえば志向性をその特徴の1つとしようとすると、こうしたケースをどのように処理するかということが問題となる。

また、この問題とも関連するが、情動が命題的態度の一種であるとして、それは他の命題的態度とどのような関係にあるのか、ということも大きな問題である。多くの場合、私たちは何かを見たり聞いたりして、喜んだり、悲しんだり、怒ったり、等の情動を抱くことになるが、何かを知覚することと知覚した事柄、すなわちその知覚の内容についての何らかの情動を抱くことは、事実としては因果的に結合されているとしても、論理的には切り離しうるものなのか、それとも、情動を抱くことはそれ自体が一種の知覚なのか、というようなことも検討すべき問題となる。さすがに、見ることや聞くことのような知覚と情動をまったく同列に考える論者はいないが、情動はある種の判断であるとか、思考の一種であるとか、解釈作用であると

いうように考える論者は存在する。しかし、そのように考えるのははたして妥当なのだろうか。これは大きな問題である。事実、情動がその本質的部分として思考ないし信念のようなものを含むとか、そうした命題的態度と似たタイプの命題的態度であると考えられるかどうか、ということについては論争があった。それがいわゆる認知主義論争である¹⁴。これに関連する話は後で述べる予定であるので、ここでは話を先に続けようと思う。

情動をめぐる認知主義論争と無関係ではないが、情動は生得的なものかどうかという点でも議論がある。1872年にC. ダーウィンが人間の代表的な情動に伴う顔の表情の研究を発表している¹⁵が、そこでは恐怖や怒りのような基本的な情動は生得的であると考えられている¹⁶。このアイディアは20世紀後半にエクマン等によって復活させられた¹⁷。また、進化心理学者などもこの立場に立って議論をしている。しかし、他方で、恥ずかしさの概念は日本と西洋で異なっていると、甘えの概念は日本独特のものである、などと言われることがある。さらに、文化人類学者によれば、ニューギニアのグルルンバ族の人はずっと「野ぶたになる(become wild pigs)」ことがあるという。つまり、普段は普通に生活している人がある日突然攻撃的、暴力的になり、周りにも多大の迷惑をかけるのだが、数日すると元に戻り、何事もなかったように普段の生活を送る。周囲の人々も、それはよくあることと受けとめ、その社会ではさほど驚くことではないとして扱われるそうである¹⁸。こうした例を考えると、情動は社会ごとに異なるものであり、その意味ではそれぞれの社会に固有のもので、と主張したくなるかもしれない。そのように主張する立場——これはしばしば、社会構成主義と呼ばれる——では、情動は社会的に形成されたものであるので、生得的に備わったものではないと考える。つまり、情動は後天的に得られたものというわけである。すると、当然、生得論者と社会構成主義者との間で論争が起こることになる¹⁹。

この両者をうまく調和させようという第3の立場も存在する。この立場では、たとえば、怒りや恐怖などの基本的な情動は生得的であるが、それらの基本的な情動——基礎的情動(basic emotions)——を組み合わせることができる他の情動はそれぞれの社会に独特のものであって、それらは後天的に得られるとされる。筆者自身はこの立場に多少共感を覚えるが、ここではこれについてもこれ以上述べることはしない。ただ、基礎的情動があるとして、それは具体的にはどのようなものなのか、ということをめぐる議論があることだけは指摘しておきたい²⁰。

情動にまつわるもう1つの哲学的関心は、情動と道徳ないし倫理との関連である。本稿の第1節において、論理実証主義運動が勢いがあった頃に、倫理的言明をどう考えたらよいかという文脈で情動主義という立場が提案されたことがあると述べた。その考えによれば、人が倫理的判断「xはFである」という言明をなす場合には、

その「F である」という言葉の機能は純粋に情動的であって、x についてのその人の情動を表現しているに過ぎない、ということであった。今日このような考え方をそのまま採用する論者はいないと思うが、最近、道德心理学が盛んになってきており、倫理学でも自然主義的傾向が出てきているようで、道德（的判断）を情動によってなんとか基礎づけようという動きもあるようである。しかし、このような動きに対してはただちに反論が予想される。すなわち、もし道德的判断を情動によって定義しようとするならば、情動自体は道德的要因をもっているはずであろう。さもなければ循環論に陥ってしまうからである。しかし、先に情動の合理性の話のところで示唆したように、ある場合に生じる情動は道德的に見て妥当ないし適切であるのに対して、別の場合に生じる情動は道德的に見て適切ではないことがある。たとえば、真面目に働いていた人がある日突然、「会社が経営不振で合理化しなければならないので君は今日で首だ」と会社から通告されたでしょう。その人は怒ると思われるが、その人のその怒りは当然であり、道德的にも正当化されると考えられる。おそらくこの場合には、会社側（の行為）が道德的に非難されるべきであろう。しかし、次のような場合はどうであろうか。ある人が禁煙の場所でタバコを吸ったとする。それを見とがめた別の人が穏やかに「ここは禁煙ですよ」と注意したところ、その喫煙者が逆切れして注意した人に対して怒り出したでしょう。このような場合には、たとえ、その喫煙者の人柄やその状況から、彼が怒り出すまでの因果過程はごく自然であったとしても、その怒りは道德的に正当化されないだろう。ここでは、注意した人の行為は道德的にまったく正当だと考えられる。こうした例を考えると、情動自体が道德的に特徴づけられる（すなわち、道德的判断を下される）のであって、道德が情動によって規定されるのではないように見える。これは非常に簡単な例であるが、他にも道德と情動がどのように関係しているのかを見なければならぬ点が多い。このようなわけで、道德と情動の関係を考察する情動の哲学の研究者も少なくない。

以上、情動に関して最近の（英米の）哲学者がどのようなことに関心を持っているかについて簡単に見てきた。他にも情動についての関心事はたくさんあると思うが、ここではこのくらいにして、以下では筆者自身が最近気になっている点についてもう少し述べようと思う。

（注）

10 プラトンは次のように述べている。「事の善し悪しを理知的に勘考した部分が、他方のただ盲目的に憤慨する部分を叱りつけている……」（藤沢令夫訳『国家』岩波文庫 1979、IV441C）

「[理知的部分]は知恵があつて魂全体のために配慮するものであるから、支配するという仕事は本来ふさわしく……」（同IV441E）「この二つの部分がそのようにして生まれ、ほんとう

の意味で自分の仕事を学んで教育されたならば、〈欲望的部分〉を監督指導することになるだろう。」(同IV442A)

11 D. Hume, *A Treatise on Human Nature*, ed. by L. A. Selby-Bigge and P. H. Nidditch, Clarendon Press 1992, Vol.2, Part3, §3

12 A. Damasio, *Op. cit.*, Ch.9 (pp.212-217) (田中三彦訳『デカルトの誤り』ちくま学芸文庫 2010, pp.323-331)

13 こうしたことにアリストテレスはすでに気づいていた。「然るべきことがらについて、然るべきひとびとに対して、さらにまた然るべき仕方において、然るべきときに、然るべき間だけ怒るひとは賞賛される……その不足は——それは『意気地なし』とでもいうか、名称は何であってもいいが——非難される。」(高田三郎訳『ニコマコス倫理学』岩波文庫 1971、1225b-1226a)

14 認知主義とは簡潔に言えば、何らかの思考、信念、ないし認知が情動にとって本質的であるとする立場である。たとえば、R. Solomon, *True to Our Feelings*, Oxford University Press 2007, p.32 参照。認知主義論争については、服部裕幸「情動の本性」(信原幸弘・太田紘史編『新・心の哲学Ⅲ情動篇』勁草書房 2014 の第1章)の第2節を参照。

15 C. Darwin, *The Expression of the Emotions in Man and Animals*, Chicago University Press 1965. (浜中浜太郎訳『人及び動物の表情について』岩波文庫 1931)。初版は1872年に出版されている。

16 少なくとも、ルドゥーはそのように理解している。ルドゥー著、松本元・川村光毅訳『エモーショナル・ブレイン』東京大学出版会 2003, p.133

17 P. Ekman and W. V. Friesen, *Op. cit.*

18 これらの例はルドゥー, *Op. cit.*, pp.140-141 や J. Prinz, *Gut Reactions*, Oxford University Press 2004, pp.135-136 で言及されている。

19 Prinz, *Op. cit.*, pp.103-159 参照。

20 デカルトによれば、驚き wonder、愛 love、憎しみ hatred、欲望 desire、喜び(ないし楽しさ) joy、悲しみ sadness の6つが基礎的情動である。エクマンは、喜び(ないし楽しさ) joy、怒り anger、悲しみ sadness、驚き surprise、嫌悪 disgust、恐怖 fear の6つをあげる。R. プルチックはこれに予測 anticipation と信頼 trust を加えて、8つを基礎的情動としている。ルドゥー、*Op. cit.*, p.138 参照。筆者自身の基礎的情動についての見解は、服部裕幸「情動の本性」第5節において簡単に述べておいたので参照されたい。

第3節 「取り扱いの厄介な(recalcitrant)」情動について

前節において、情動の志向性や認知主義論争について簡単に触れたが、そのこと

についてももう少し詳しく述べよう。気分の場合を考えてみれば分かるように、情動のすべてが志向性をもっていると言えるかどうかはたしかではない。しかし、怒りや恐怖や喜びなどの情動が志向内容をもっていることは否定できないだろう。たとえば、ある怒りは「不当に解雇されたことへの怒り」であり、ある恐怖は「猛犬に咬まれるのではないかとこの恐怖」であり、ある喜びは「志望校へ合格したという喜び」なのである。そしてまた、これらの情動にとってはその志向内容が本質的である。少なくとも、その志向内容がなければその情動の個別化ができないとも考えられる。したがって、その情動を抱く人はその志向内容を何らかの形で「心に抱いている」ことになる。いわゆる認知主義者はこの点を重要視する。この「心に抱いている」をどう表現するかは論者によって異なり、信念を抱いていると言われたり、思考を抱いていると言われたり、判断していると言われたり、解釈していると言われたり、評価していると言われたり、等々、実にさまざまである。ここでは議論を単純化するために、信念で考えることにしよう。会社に不当に解雇された人は自分が会社に不当に解雇されたと信じており、そのことに怒りを感じていると考えるのは自然である。恐怖や喜びの場合でも同様である。また、不当に解雇された人のその怒りは、彼がそのように信じていなかったら、自然な形で説明することもできない。この点も、恐怖や喜びについても同様である。このように、情動はある種の信念をそのうちに内在させているように見える。しかし、これに対して強力な批判が反認知主義者から浴びせられてきた。彼らの批判の論点はいくつかあるが、その代表的なものの1つは、当該の信念PをもたないにもかかわらずPへの情動(例えば、恐怖)を抱くケースがあるというものであり、もう1つは、信念をもつとは言えない動物でもいくつかの情動を抱くケースはあるというものである。ここでは、前者の批判をとり上げて考えてみたい。なお、前者の例となるような情動はしばしば「取り扱いの厄介な(recalcitrant)」情動²¹と呼ばれる。

たとえば、世の中には飛行機(に乗るの)が怖いという人がいる。その人は、飛行機のような巨大で重いものが空を飛ぶなどということはそもそも不自然なことであり、ちょっとしたことで墜落するかもしれないと思っているのかもしれない。その場合には、その人の恐怖は飛行機が墜落するかもしれないという恐怖であり、また彼ないし彼女は飛行機が墜落するかもしれないという信念を抱いていると主張できるかもしれない。しかし、彼ないし彼女が普通の理性をもっているなら、説明されれば飛行機が空を飛ぶことは航空力学的に言って何ら不自然ではないことを理解するであろう。何かの事故で墜落するという可能性にしても、ゼロではないにせよ、滅多に起るものではないことがこれまでの経験から明らかであり、また、事故の確率も自動車事故のそれとくらべればはるかに低いという説明にも納得するに違いない。したがって、そのように説明された時点では、彼ないし彼女は、普通の意味で

は、飛行機が墜落する可能性がきわめて高く、それゆえ飛行機が墜落するのではないかと信じているとは言えないであろう。しかし、それでも彼ないし彼女はやはり飛行機に乗るのが怖い、ということがある。

この種の例は認知主義に対するかなり直接的な反例になるので、認知主義者は何らかの対応をしなければならないし、事実この種の批判に対して認知主義者は対応してきた。その代表的なものは、情動に本質的に内在しているとされる信念的要素は通常の意味での信念ではないとするものである。それを何と呼ぶかは論者によってさまざまである²²。しかし、情動のうちに本質的に内在しているとされる認知的要素を何と呼ぶかは言葉の上の問題で、それ自体はあまり本質的なことではない。問題は、それがいかなるものであり、それは通常の意味での信念や他の命題的態度とどのような関係にあるのかということである。いま仮に、情動のうちに本質的に内在しているとされる認知的要素を「評価的判断(appraisal judgment)」と呼ぶことにしよう²³。認知主義者によれば、先程の飛行機（に乗るの）が怖い人は飛行機が墜落することはまずないとは信じているが、飛行機が墜落することに対してある種の評価的判断は下しており、それが飛行機に乗ることの恐怖という情動にとって本質的だということになる。すると問題になるのは、この場合の飛行機についての信念と飛行機についての評価的判断の関係はいかなるものか、そしてまた、名古屋から札幌へ行くのに飛行機で行くという選択をせず、列車を乗り継いで行くという選択肢あるいは船で行くという選択肢を選んだこととそれらの命題的態度はいかなる関係にあるのか、ということである。標準的な行為論によると行為は欲求と信念によって説明される²⁴ので、この人物の場合、飛行機が墜落することはまずないという信念があり、飛行機に乗れば（早く、楽に）札幌へ行けるという信念もあり、札幌へ行きたいという欲求があるならば、飛行機で札幌へ行くということになりそうなものである。しかし、現実にはそうならない。したがって、ここでは信念に代えて評価的判断をとり、それと欲求によって、この人物の行為を説明しよう、というわけである。この解決策の難点は、通常の意味での信念と評価的判断とはどう違うのか、またその力関係はどのように決まるのか、といった点が語られないかぎり、問題が実質的にはほとんど未解決のまままだということである。

取り扱いの厄介な情動の問題に対する最近の有力な解決策は二重システム理論と呼ばれるものを利用するものである。まず二重システム理論とは何なのかということの説明から始めよう。この理論によれば、簡単に言えば、人間の認知や行為を形成するシステムには2つのものがあり、1つは進化的に古いシステム——便宜上こちらをシステム1と呼ぼう——で、これは無意識的、自動的に作動し、迅速で直観的に働く。もう1つは、進化的に新しく、人間において特に発達したシステム——こちらをシステム2と呼ぶ——である。こちらは意識的、熟慮的に作動するが、処

理速度は遅い。そして、どのような行為を起こすかの決定はこの2つのシステムの相互作用の結果によるのである²⁵。この理論にしたがうと、外から入ってきた情報の流れはあるところで2つに分かれ、1つはシステム1に入り、他方はシステム2に入る。それぞれのシステムの帰結が同じであれば、その帰結が最終的な意志決定となり、行為へとつながっていくが、2つのシステムの帰結が一致しない場合には、「強い」帰結の方にしがった行為が実現される、といった具合である。この理論は心理学ではわりと広く受け入れられているようであり、また近年では脳・神経科学的にも基礎づけられているという²⁶。この理論で取り扱いの厄介な情動がどのように説明されるかを見てみよう。たとえば、蛇が怖い人が小さな蛇を見て怖くて逃げ出すとする。この理論では、この時の恐怖をその人の脳のある部分の状態と考える。さて、実はその蛇は毒をもたず、また、その蛇は小さくてそれによって締め殺されることなどもないという信念をその人はもっているかもしれない。しかし、このような信念をもっているもやはりその人は蛇が恐くて（すなわち、取り扱いの厄介な情動！）逃げ出すかもしれない。このとき、その人の信念状態も彼ないし彼女の脳のある部分の状態と考える。二重システム理論では、このようなケースでは、恐怖からの情報の方が信念からの情報よりも「強い」——コネクショニズム的表現を用いれば、ノードへ入っていく電氣的信号の重みづけが大きい——ために、最終的に逃げ出すという行為が生じると説明される。この説明はかなり魅力的なのだが、筆者はこれを全面的に支持するというわけにはいかない。というのは、この説明、あるいはそこで用いられている二重システム理論は新ジェームズ主義的な情動の「感じ」説(feeling theory)（あるいは、そのヴァリエーション）とは相性がいいと思うが、筆者は情動の「感じ」説に対しては懐疑的にならざるを得ないからである²⁷。その理由は、要点だけ述べれば、この説明は情動を「感じ」と同一視できるという見解を前提しているように思われるが、その前提が疑わしいからである。上の蛇の例では巧く行くかもしれないが、他の例でもうまくいくとはかぎらない。というのも、すべての（志向内容をもった）情動がこのような「感じ」を伴っているというのは事実と反するように思われるからである²⁸。

たとえば、楽しみ(joyないし amusement)を考えてみよう²⁹。数学（をやるの）が楽しくて仕方ない人は、数学の問題を解いている時に何か独特の「感じ」を経験してはいない。（難しい問題を解いた時に何らかの「感じ」を経験するかもしれないが、それを数学の楽しみの「感じ」とすることはできない。なぜなら、もしそうだとすると、解くことができるまでは数学を楽しんでいないことになるし、解けなかったときには数学（をやるの）を楽しまなかったことになるからである。これは実情にあわないであろう。）また、数学（をやるの）が楽しくて問題にチャレンジする人は、その問題にチャレンジする前に何らかの「感じ」を経験しているわけでもない³⁰。

ただ、このように述べたからといって、筆者はこの種の情動が単なる傾向性(disposition)にすぎないと考えているわけでもない。親切な人(つまり親切心のある人)は何らかの機会に(つまり原因となる出来事が起って)ある種の行為(つまり親切と呼ばれるような行為)を行なうわけで、その行為の瞬間に親切心なる心的出来事が生じたわけではない、というのはその通りである。その意味で、親切心はその人の傾向性であると述べてよかろう。しかし、かつてフェルマーの予想に取り組んだ多くの数学者は、単なる傾向性の1つの現れとしてある特定の場合にそのような行為をしたのではなく、やはりフェルマーの予想(を解決すること)が好奇心をそそったから、興味深かったから、つまりそれ(を解くの)が楽しかったからだと思われる。また、ペレルマンがポアンカレ予想にチャレンジし、それを解いたのも、彼がそれに強い興味を覚えたからであって、単なる彼の傾向性ということで片付けることはできないだろう。彼らは強制されたわけではないし、義務感からでもないし、また単に社会的に意義があるからというだけの理由でこうした研究をしたのではない。おそらくそれだけでは彼らの研究は続かなかったと思われる。やはり「楽しい」から、「面白い」からなのである³¹。

もちろん、このように述べたからと言って、好奇心や興味を覚えることや楽しさが、脳のある状態によって基礎づけられた何らかの「感じ」であるという主張へ戻ろうというわけでもない。ある数学者の脳の状態を適当に(操作できたらとしての話だが)操作することによって然るべき脳状態を実現したとしても、それでその人がポアンカレ予想を解く楽しさや喜びを経験することはできない。その人が実際にポアンカレ予想を解いて初めてその人はポアンカレ予想を解く楽しさや喜びを経験できるのである。(仮に、人為的に脳を操作して、ポアンカレ予想を解いたと思うことに対応する脳の状態を実現し、それにともなって何らかの「感じ」が生じたとしても、実際にその人が証明する努力をしていなければ、そしてまた証明がなされていなければ、その人はポアンカレ予想を解いたことの喜びをもったとは言われぬ³²。)このあたりのことは脳・神経科学的考察をいくら進めてもわからず、むしろ、素朴心理学的(folk psychological)考察をきめ細かくやっつけていかなければならないのではなかろうか。

(注)

21 この表現は J. D'Arms and D. Jacobson, 'Significance of recalcitrant emotion (or, anti-quasi judgmentalism),' in A. Hatzimoysis (ed.), *Philosophy and the Emotions*, Cambridge University Press 2003, pp.127-145 に負う。彼らによれば「情動は、その情動と緊張関係にある判断を当の主体がなしているにもかかわらず、なお存在するとき、『取り扱いが厄介である』」とされる。

22 例えば、R. Solomon, 'Emotions, thoughts, and feelings: what is a cognitive theory of emotions

and does it neglect affectivity?’ in A. Hatzimoysis (ed.), *Philosophy and the Emotions*, Cambridge University Press 2003, pp.1-18 を参照されたい。

23 Prinzによれば、M. Arnoldがこの言葉を流行らせたようである。Prinz, Op. cit., p.14 参照。

24 D. Davidson, ‘Actions, reasons, and causes’(1963), in his *Essays on Actions and Events*, Clarendon Press 1980, pp.3-19.

25 二重システム理論については、西堤優「自己制御と誘惑」(信原幸弘・太田紘史編『新・心の哲学Ⅲ 情動篇』第2章)を参照。

26 西堤、Op. cit. 参照。

27 服部、Op. cit. 参照。

28 ここでの議論においては、「感じ」をとまなう情動について新ジェームズ主義的理論が妥当する可能性は排除されない。したがって、シンポジウムの中で秋葉剛史氏が指摘したように、認知主義的情動論をとりつつ、限定的に二重システム理論を採用した説明を受け入れるという道はあり得ると思う。シンポジウムでの村田純一氏への回答でも述べたことであるが、情動は自然種ではなく、「情動」という言葉で実に雑多なものが含まれている。それ故、単一の理論ですべての情動が説明できるとは思われない。Griffiths, *What Emotions Really Are*, University of Chicago Press, 1997, Ch1 参照。したがって、筆者は情動に関する生理学的、脳・神経科学的探究はある側面においては有用であり、哲学者はその知見を利用すべきだとは考えるが、それにもかかわらず、本文で論じるように、素朴心理学的探究を完全に棄てる必要はないし、それどころかある側面においてはそれが不可欠であると考えている。

29 楽しみ(joy)を情動(emotion)に含めることについて疑問を抱く向きがあるかもしれないが、たとえばデカルトは楽しみを(基礎的)情動に1つに数えている。また、ライルは「情動」という見出しの下で楽しみ(joy や amusement)について論じている。Ryle, Op. cit., Ch.4 参照。プリンツも基礎的情動について論じる際、多くの論者が楽しみを情動の1つに数えていることを例示している。Prinz, Op. cit., p.87 参照。ダームズとジェイコブソンはある論文で次のように述べている。「われわれは何らかの情動(emotion)について(とりわけ羨望(envy)、恥(shame)、楽しさ(amusement)について)普通に考えるとき、そしてまた哲学的考察をおこなうときに……」(J. D’Arms and D. Jacobson, ‘The moralistic fallacy: on the ‘appropriateness’ of emotions’, *Philosophy and Phenomenological Research* 61, 2000, p.74.)

30 私はこの辺りの議論ではライルのかつての議論がほとんどそのまま通用すると考えている。Ryle, Op. cit., Ch.4 参照。ただし、本文中でも述べるように、傾向性によって完全に問題が解決されるとも考えていないので、その点で筆者はライルからは離れることになる。

31 数学者の小平邦彦がやはり数学者の飯高茂との対談の中で次のように語っている。「飯高:先生はどんなふうな感じで数学をおやりになるんですか。小平:どんな感じって……。飯高:要するに3つあって、面白くてしょうがないからするのと、いやでいやでしょうがないけれども我慢しながら歯をくいしばってやるのと、これは非常に大事だから是が非でもや

らなければならないという世界秩序的な観点からやるのと、そのどれでしょうか。小平：そういうことからいったら、面白いからやってるんだらうな。」(『数学セミナー』2015, Vol.54, No.3, pp.42-50 の p.44)

32 ただし、このことは実際には間違った証明を与えたにもかかわらず、それを正しい証明と思い込んで、問題を解決したとぬか喜びするというケースがあることを否定するものではない。

第4節 情動の全体論的性格について ——楽しさの素朴心理学から——

前節の最後の部分で楽しさについて考えてみたが、その考察をもう少し続けよう。一口に「数学が楽しい(面白い)」と言っても、事柄はそれほど単純ではない。教員をしていると学生との次のような会話を経験することがある。(ここでは数学を例にとったが、他の分野でも同様であろう。)(漠然と)数学が楽しい(好きです、面白い、に興味があります、をやりたい、……)。「で、数学の何に興味があるの?数論?代数幾何?関数論?基礎論?」「これからもっと勉強してみないとわかりません。」ここから分かることは、漠然と数学(をやるの)が楽しいということと、数学のある特定の分野ないし領域(をやるの)が楽しいというのでは異なるということ、しかも、その両者は無関係ではなく、数学のいろいろな分野を勉強していくと、次第に自分が面白いと思える分野が限定されてくる、あるいは具体化されてくる、ということである。哲学用語で表現すれば、2つの楽しさの志向内容は一方が漠然としたものであり、他方がより具体的なものになっているというように異なっていること、そして、数学を勉強するという行為を介して前者は後者へと変化していくということである。

次のA君の会話の断片はまた別の側面を明らかにしてくれる。「自分は数学が面白いし、数学をやっていると楽しいと思う。でも、とても数学者にはなれないと思った。B君を見ていると、つくづく自分には数学の才能がないと思わざるを得ない。彼は僕がどうしてもいいか分からない問題を簡単に、こうやってこうやればいいんだよ、と事もなげに解いてみせてくれる。嫉妬するなんてもんじゃない。ただただ、そういう才能を持っている彼が羨ましい。」A君は数学(をやるの)が楽しいのだが、自分やB君の数学の才能についての信念を通じて他の情動、すなわち羨ましさも感じるのである。嫉妬でなく羨ましさなのは、おそらくA君はB君を自分のライバルとさえみなせない程に高く評価せざるを得ないからであろう。ここで注目すべきなのは、ある情動が信念を介して他の情動をもたらすことがあるということである。

また、ここではある種の情動と職業選択との関連性についても示唆されている。すなわち、数学（をするの）が楽しいだけでは数学者になれない（かもしれない）のである。

次のA君の発言はさらまた別の側面を明らかにする。「僕にはB君のような才能はない。だから、専門書に書いてある証明を何度も自分でフォローして、『自明』とか『明らか』とか『同様』というところも全部ちゃんと書いて、自分で納得できるようにするんだ。それも何度もやらないと頭に入らない。でもそうやっているとなんとなくコツというか、感じがつかめてきて、似たような問題にもそのやり方を適用できるようになるんだ。そのうちに、少しばかり一般化できないかと予想して、それを証明しようともしてみる。うまく証明できると、もうそれだけでうれしくなってるね。僕なんて、そのレベルさ。」ここからは、本（の内容）を理解するというプロセスが、本に書かれているデータを心の中のノートのようなものには書き写すというような単純なものではないということ、何度も同じようなプロセスを経ないと「感じがつかめた」理解に達しないということがわかる。そして、そのようなプロセスを経ることで嬉しさという情動が経験されるというのである。もう少し細かく述べると、見るという行為を通してまず本にどのような文が書かれているかがA君の心の中に入るが、それでただちに本（に書かれた文）の志向内容がすべて彼の心の中に入る、すなわち知識内容になるわけではない。そうなるためには、何度もその本を読む、すなわち本にどのような文が書かれているか何度も見、次々に入ってくる文の志向内容から必要があれば推論をし、推論のステップにおいて欠けている、ないし省略されている部分を補足し、それをノートに書いたりするといった行為をする必要があるのである。おそらくその際には、すでに理解している（知識としてもっている）事柄との論理的関連（必ずしも演繹的関連とは限らない）も重要な役割を演じるであろう。このような過程を経て、ある程度本の内容が理解できると、次の段階として、その理解した内容から演繹的に、あるいは帰納的に、あるいは類比的に、より一般的な（といっても、取り立てて新しい定理（の予想）だと言い立てるほどのものでもない）事柄を推論し、その推論が正しいかを、証明を試みることによって確かめたり、あるいは、反例を見つけてその推論が誤っていることを示したりすることを試みる。その際、おそらくノートにメモ書きのようなことをすることにもなる。このようなプロセスを経るにはA君のような場合にはかなりの時間を要し、なかなか理解が進まない場合には、傍からは大変に見え、苦痛だろうとさえ思えるかもしれない。しかし、当人はそのようにはまったく思っておらず、それどころか経過時間を長くは感じないかもしれない。これこそが、数学を楽しむということにほかならない。そして、こうしたプロセスの一部として、予想した一般化がうまく証明できた時に嬉しく思ったりするということが起るのである。

少し記述が冗長であったかもしれないが、ここで重要なことは、1つの情動は他の情動や情動以外のさまざまな命題的態度や行為と密接に結合しており、しかもその結合は単なる因果的、偶然的な結合ではなく、その結合がなければ当の情動がその情動として成立していると言えるかどうか疑わしくなるほどの強固な結合、いわば論理的な結合であるという点である³³。この意味で情動は全体論的性格をもっているといえることができる。

(注)

33 厳密に言えば、ある情動と他の情動や命題的態度の結びつきがかなり密接であっても、「論理的」とまでは言えないケースはあるかもしれない。そのような場合には、しかし、その人は少々「おかしな」人、精神ないし心を病んでいる人とみなされるかもしれない。

まとめ

まとめに入ろう。本稿では最初に、20世紀の英米哲学圏において情動がどのように扱われてきたかを、筆者の個人的な視点から概観し、20世紀末あたりから情動に関する哲学の議論が盛んになってきたことを見た。

次に、そうした議論の中では、情動は従来考えられてきたような非合理的なものなのか、志向性は情動を特徴づけることができるか、情動はその本質的要素として信念を含んでいるか、情動は生得的なものか、それとも社会的に形成されたものなのか、情動と道徳はいかなる関係にあるか、といったことがしばしば主題的にとり上げられてきたことを見た。

最後に、筆者自身が最近気にしている問題の1つである、取り扱いの厄介な情動をどのように考えたらよいかという問題について少しばかり述べた。二重システム理論に訴えて解決できそうに思えるところもあるが、それで全部片がつくわけではなく、筆者としては素朴心理学的考察が必要な部分も残されているということを示唆したつもりである。

参考文献

- アリストテレス著、高田三郎訳『ニコマコス倫理学（上、下）』岩波文庫 1971
- A. J. Ayer, *Language, Truth and Logic*, 2nd. Ed., Victor Gollancz Ltd. 1946
- エイヤー著、吉田夏彦訳『言語・真理・論理』岩波書店 1955
- A. Damasio, *Descartes' Error*, Macmillan 1994
- ダマシオ著、田中三彦訳『デカルトの誤り』ちくま学術文庫 2010
- P. Ekman and W. V. Friesen, 'Constants across cultures in the face and emotion', *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol.17, No. 2, 1971, pp.124-129
- D. Davidson, 'Actions, reasons, and causes'(1963), in his *Essays on Actions and Events*, Clarendon Press 1980, pp.3-19
- D. Davidson, 'How is weakness of the will possible?'(1970), in his *Essays on Actions and Events*, Clarendon Press 1980, pp.21-42
- D. Davidson, 'Hume's cognitive theory of pride'(1976), in his *Essays on Actions and Events*, Clarendon Press 1980, pp.277-290
- D. Davidson, *Essays on Actions and Events*, Clarendon Press 1980
- デイヴィドソン著、服部裕幸・柴田正良訳『行為と出来事』勁草書房 1990
- C. Darwin, *The Expression of the Emotions in Man and Animals*, Chicago University Press 1965
- ダーウィン著、浜中浜太郎訳『人及び動物の表情について』岩波文庫 1931
- J. D'Arms and D. Jacobson, 'The moralistic fallacy: on the 'appropriateness' of emotions', *Philosophy and Phenomenological Research* 61, 2000
- J. D'Arms and D. Jacobson, 'Significance of recalcitrant emotion (or, anti-quasi judgmentalism),' in A. Hatzimoysis (ed.), *Philosophy and the Emotions*, Cambridge University Press 2003, pp.127-145
- R. Gordon, *The Structure of Emotions*, Cambridge University Press 1987
- P. Griffiths, *What Emotions Really Are*, University of Chicago Press 1997
- P. Goldie, *Oxford Handbook of Philosophy of Emotion*, Oxford 2010
- 服部裕幸、「情動の本性」、信原幸弘・太田紘史編『新・心の哲学Ⅲ 情動篇』勁草書房 2014、第1章
- D. Hume, *A Treatise on Human Nature*, ed. by L. A. Selby-Bigge and P. H. Nidditch, Clarendon Press 1992
- A. Kenny, *Action, Emotion and Will*, Routledge 1963
- R. S. Lazarus, 'On the primacy of cognition', *American Psychologist* 39, 1984, pp.124-129
- ルドゥー著、松本元・川村光毅訳『エモーショナル・ブレイン』東京大学出版会 2003

- 西堤優、「自己制御と誘惑」、信原幸弘・太田紘史編『新・心の哲学Ⅲ 情動篇』勁草書房 2014、第2章
- プラトン著、藤沢令夫訳『国家（上、下）』岩波文庫 1979
- J. Prinz, *Gut Reactions*, Oxford University Press 2004
- G. Ryle, *The Concept of Mind*, Hutchinson 1949
- ライル著、坂本百大・井上治子・服部裕幸訳『心の概念』みすず書房 1987
- R. Solomon, *The Passions: Emotions and the Meaning of Life*, Hackett 1976
- R. Solomon, 'Emotions, thoughts, and feelings: what is a cognitive theory of emotions and does it neglect affectivity?', in A. Hatzimoysis (ed.), *Philosophy and the Emotions*, Cambridge University Press 2003, pp.1-18
- R. Solomon, *True to Our Feelings*, Oxford University Press 2007
- C. L. Stevenson, *Ethics and Language*, Yale University Press 1945
- R. B. Zajonc, 'On the primacy of affect', *American Psychologist* 39, 1984, pp.117-123